6　東海地方の鬼瓦

前田　清彦

A　はじめに

東海地方の古代の鬼瓦については、かつて旧国の伊勢・美濃・飛騨・尾張・三河・遠江・駿河における古代（およそ10世紀代まで）の鬼瓦の集成・分析を行い、東海地方における古代の鬼瓦の出現と展開を概観するとともに、鬼面文鬼瓦が地方に定着する国分寺創建期の各国の様相について考察したことがある（前田2000）。

あれから20年以上が経過し、その際に設定した鬼瓦型式及び復元図については、一部修正を加える必要が生じたものがあるほか、静岡県浜松市の篠場瓦窯出土の白鳳期の素文鬼瓦など新出資料も加わったため、事務局の発表要旨集作成要領に従い、今回改めて旧国ごとの古代の鬼瓦の導入と展開について整理をし直した。

対象とする地域については、今回は岐阜県下の美濃・飛騨地域が中部（岐甲信）地域として別途発表が予定されているため、東海地方として三重・愛知・静岡３県に属する旧国の伊勢・伊賀・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆（志摩国は鬼瓦の出土なし）を対象とし、旧稿同様に10世紀代までの資料を取り扱った。

なお、東海地方では愛知県下の尾張地域において、古代末期に京都の鳥羽離宮等で使用するための瓦が瓦陶兼業窯で生産されているため、それら古代末期の鬼瓦についても、京都の供給先の遺跡出土資料を含め集成し、尾張産院政期鬼瓦として今回型式設定を試みた。そして、12世紀代の院政期の鬼瓦について、その形状・規格・固定装置のあり方等から、屋根上における鬼瓦の設置方法についても若干の検討を加えた。

B　鬼瓦の型式設定

i　新出の鬼瓦

旧稿（前田2000）で取り扱わなかった鬼瓦や、その後新たに出土した鬼瓦、また出土資料の増加により復元図の修正が必要となった鬼瓦について以下解説を加える。

伊勢国府跡（三重県鈴鹿市）　旧稿で復元図を作成した伊勢国府Ⅰ式について、その後の伊勢国分寺跡の小院の調査で伊勢国府Ⅰ式の上半部の大形破片が出土し（新田2018b）、全形が角頭台形でなく円頭台形に復元できることが確認された（第１図１）。

伊勢国分寺跡・国分尼寺跡（三重県鈴鹿市）　旧稿で鬼面文鬼瓦の左目周辺の破片資料を提示した伊勢国分寺Ⅲ式について、旧稿の伊勢国分尼寺Ⅱ式（復元図）を国分寺跡出土の新

出資料を参考に修正して伊勢国分寺Ⅲ式（復元図：第１図２）と設定し直す。加えて鬼面文鬼瓦の左牙周辺の破片（第１図３）から伊勢国分寺Ⅳ式を新たに設定する。また、周縁が素文の伊勢国分尼寺式鬼瓦について、旧稿の伊勢国分尼寺Ⅰ式Ｂを祖型と考え伊勢国分尼寺Ⅰ式（第１図４）と設定し直し、併せて旧稿の伊勢国分尼寺Ⅰ式Ａを伊勢国分尼寺Ⅱ式（第１図５）と設定し直す。

南浦（大鹿）廃寺（三重県鈴鹿市）　伊勢国分寺跡南東側に所在する白鳳期創建の南浦（大鹿）廃寺出土の鬼面文鬼瓦の口辺部破片（第１図８：藤原 2005）から南浦（大鹿）廃寺Ⅰ式を設定する。

川原井瓦窯（三重県鈴鹿市）　旧稿で川原井瓦窯Ⅰ式として設定した鬼瓦については、その後資料を実見した結果、伊勢国分尼寺Ⅰ式Ａ（今回伊勢国分尼寺Ⅱ式に変更）と同型式であることが確認できたので、川原井瓦窯Ⅰ式の設定は撤回する。

三田廃寺（三重県伊賀市）　樹枝状文様の左右に素弁八葉蓮華文を配置する蓮華文鬼瓦（第１図６）及び鬼面文鬼瓦（第１図７）の出土が確認されている。前者を三田廃寺Ⅰ式、後者を三田廃寺Ⅱ式として設定する。なお、三重県下の蓮華文鬼瓦関連資料として桑名市南小山廃寺出土の蓮華文を施す瓦製品（第１図９）や津市広明町（四天王寺）瓦窯跡出土の文様塼（第１図 10）の出土が知られている。

尾張国分寺跡（愛知県稲沢市）　尾張国分寺跡の総括報告書（北條ほか 2011）で報告された新出鬼瓦（第２図 11）を尾張国分寺Ⅲ式として設定するが詳細は不明。

尾張元興寺跡（愛知県名古屋市）　今回集成には含めなかったが、尾張元興寺跡からは蓮華文鬼瓦の可能性のある瓦製品破片（第２図 12）が出土している（服部ほか 1994）。また、旧稿で設定した尾張元興寺Ⅰ式Ｂを、精巧なつくりから尾張元興寺Ⅰ式Ａと設定し直し、併せて旧稿の尾張元興寺Ⅰ式Ａを尾張元興寺Ⅰ式Ｂと設定し直す。更に、Ⅰ式Ｂ（旧稿Ⅰ式Ａ）に似るが文様構成の異なる鬼面文鬼瓦の右頬付近の破片（第２図 13：木村 2003）から尾張元興寺Ⅰ式Ｃを設定する。なお、尾張元興寺跡からは凸面にヘラ描きの鬼面文を描いた平瓦破片（第２図 14）も出土している（服部 2004）。

トトメキ遺跡（愛知県東海市）　後述する浜松市篠場瓦窯出土の素文の鬼瓦同様、焼成前の平瓦を鬼瓦の形状に加工した可能性の高い瓦（第２図 15：立松 1988）を今回資料実見を経て鬼瓦と同定し、素文の鬼瓦としてトトメキⅠ式を設定する。昭和 59 年度の調査で白鳳期の軒瓦や鴟尾とともに破片が２点出土している。

篠場瓦窯（静岡県浜松市）　７世紀末の操業と推定されている３号窯から軒瓦や鴟尾とともに乾燥前の平瓦を平らにし、鬼瓦の形に切り抜くことによって製作された素文の鬼瓦（第２図 16）が出土している（武田ほか 2013）。

遠江国分寺跡（静岡県磐田市）　旧稿では破片資料から遠江国分二寺Ⅰ式Ａ・Ⅰ式Ｂ・Ⅰ式Ｃを設定し、それらと異范と推定される鬼瓦をⅠ式Ｄとして取り扱ったが、近年刊行された総括報告書（平野・安藤 2017）では、塔跡から新たに出土した旧稿の遠江国分二寺Ⅰ式

A に似る別型式の鬼瓦（第２図 17）の出土が報告されており、今後、資料の増加に合わせて型式設定の見直しが必要と考えられる。

片山廃寺（駿河国分寺跡）（静岡県静岡市） 駿河国分寺に比定されている片山廃寺の総括報告書（平野ほか 2019）において、過去に講堂跡から出土した同笵鬼瓦３個体分（第２図 18：片山廃寺Ⅰ式）の笵傷の分析から、製作の前後関係等が指摘されている。

伊豆国分寺跡（静岡県三島市）『静岡県の古代寺院・官術遺跡』において唐草文鬼瓦の破片の可能性のある瓦製品（第２図 19）の出土が報告されている（鈴木 2007）。

ⅱ　東海地方の鬼瓦型式一覧

前稿（前田 2000）同様、文様構成だけでなく外形や下辺の形態、外縁の形態、製作技法、固定装置にも着目して分類し型式設定を行った。その結果、三重・愛知・静岡の３県下出土の古代（～ 10 世紀代）の鬼瓦について、49 型式に及ぶ鬼瓦型式を設定することができた（第１表参照）。

東海地方では、総じて国分寺の造営期に鬼瓦が普及・展開するため平城宮式鬼瓦等に由来する外形がアーチ形あるいは円頭台形の鬼面文鬼瓦が主体となるが、白鳳期の蓮華文鬼瓦や無文鬼瓦、藤原宮式系の重弧文鬼瓦の出土も見られ、中央の鬼瓦様式の影響を受けながら、地域的特徴を見せつつ展開していった様子が見受けられる。

また製作技法については、基本は笵型によるが、笵型からはずした後にヘラ描き等の施文を加えるものがあるほか手造りの鬼瓦も散見される。そしてトトメキ遺跡や篠場瓦窯の素文鬼瓦は、乾燥前の平瓦を加工し鬼瓦として用いたと推定されるが、大和山田寺では鬼瓦の形に焼成後の平瓦を打ち欠いて転用した事例も知られ（武田ほか 2013）、尾張元興寺跡出土の鬼面線刻平瓦も代用鬼瓦の可能性がある。

なお、鬼瓦の固定方法としては、いわゆる釘穴を施す釘留め式のものが大半を占め、南都七大寺式に特徴的な背面に把手あるいは把手状の挟りを有する牽引式は古観音廃寺Ⅰ式にみられるのみである。他に固定装置の無い鬼瓦型式も散見され、鳥衾用の軒丸瓦を鬼瓦頂部の押さえとして棟に固定したと推定される。釘穴については円形が基本でまれに方形のものがあり、ヒタキ廃寺出土鬼瓦の釘穴部には鉄錆が残り、鉄製の金具を用いたと推定される（釘穴には鉄釘を打ち込むのではなく金具を填め込んだと考えられる：森 2001）。この他、鬼瓦の表面に赤彩を施した痕跡を残すもの（伊勢寺廃寺Ⅱ式）や、鬼瓦裏面に墨書を記したもの（智積廃寺Ⅰ式）も見られる。

C　各国の状況

ⅰ　伊勢・伊賀における鬼瓦の導入と展開

伊勢・伊賀地域では、三田廃寺から蓮華文鬼瓦と推定される瓦製品が出土している他、

外形が長方形となる可能性のある天花寺廃寺Ⅰ式が古式の鬼面文鬼瓦と捉えられ、寺跡から出土している菱形塼仏とともにその特異な存在が注目される（第３図）。

伊勢地方の鬼瓦の大半は、国府や国分二寺の整備に伴い採用された鬼面文鬼瓦及びその系譜下に位置付けられる鬼瓦であり、国府・国分寺・国分尼寺で別種の軒瓦文様が採用されたのと同様に、鬼瓦もそれぞれ独自の鬼面文様を採用し、奈良時代後半から平安時代初頭にかけ型式変化を遂げたと推定される。そのモデルとなったのは、平城宮式鬼瓦、太宰府式鬼瓦、南都七大寺式鬼瓦といった中央の鬼瓦様式であり、それぞれの影響を受けながら独自の鬼瓦型式を生み出している。そして、これらの鬼面文鬼瓦は、その形態や文様構成から①Ⅱ Ab 類に分類される伊勢国府Ⅰ式及び伊勢国分寺Ⅰ式、②Ⅲ Ab 類に分類される伊勢国分寺Ⅱ式、栃ケ池瓦窯Ⅰ式、伊勢寺廃寺Ⅱ式、③Ⅲ Ad 類に分類される伊勢国分寺Ⅲ式、④Ⅱ（Ⅲ）Af 類に分類される伊勢国分尼寺Ⅰ式・Ⅱ式の４つのグループに大別することが可能で、セット関係となる軒瓦の編年観も加味して第３図のような変遷が想定される。このうち伊勢国府Ⅰ式及び伊勢国分寺Ⅱ式は、眼・眉・巻毛の表現などに類似点が多く、ともに丁寧なつくりをなすことから、国府及び国分寺の創建鬼瓦と推定される。また、伊勢国分尼寺の創建鬼瓦は定かではないが、今回外形が円頭台形と推定される伊勢国分尼寺Ⅰ式を古式、外形がアーチ形の伊勢国分尼寺Ⅱ式を退化型式と捉え直した。そして文様が退化し手造りの鬼面文鬼瓦であるヒタキ廃寺Ⅰ式及び智積廃寺Ⅰ式は、国分寺・国分尼寺のそれぞれの鬼瓦様式の系譜下に位置付けることができる。なお、これら鬼面文鬼瓦以外に、伊勢寺廃寺では下辺の３箇所にくりこみを有し、隅棟あるいは降棟に使用されたと推定される唐草文鬼瓦（伊勢寺廃寺Ⅰ式）が出土している。平城宮式を模倣した軒瓦とセットで採用された鬼瓦型式と推定されるが、その後この唐草文鬼瓦の展開はみられない。

ⅱ　尾張における鬼瓦の導入と展開

尾張地域で古式と捉えられる鬼瓦は、蓮華文鬼瓦の可能性を有する尾張元興寺出土例（第２図 12）やトトメキ遺跡の素文鬼瓦（第２図 15）を除けば、高蔵寺瓦窯で生産され勝川廃寺に供給された重弧文鬼瓦の一群（勝川廃寺Ⅰ式Ａ・Ｂ）や大山廃寺で出土した蓮華文鬼瓦（大山廃寺Ⅰ式）を抽出でき、いずれも鬼面文鬼瓦が定着する以前の８世紀前半の所産と推定される。このうち大山廃寺Ⅰ式の蓮華文周囲の圏線を重弧文の一部と評価すれば、勝川廃寺Ⅰ式の影響下に大山廃寺Ⅰ式が成立するといった先後関係が想定でき、これら一群の鬼瓦は、藤原宮跡等で出土している重弧文鬼瓦を祖型として尾張地域で在地化した重弧文系鬼瓦として捉えることができる（第４図）。

やがて国分寺の創建と相前後する時期に尾張地域でも鬼面文鬼瓦が普及するようになるが、尾張地域の８世紀半ば以降の鬼瓦は、その鬼面構成などから３つのグループに大別することが可能である。その一つはⅢ Aa 類に分類され尾張国分寺系として把握できる鬼面

文鬼瓦であり、国分寺の創建期に平城宮式鬼瓦の強い影響を受け尾張国分寺Ⅰ式が成立し、その後尾張国分寺Ⅱ式に変化を遂げる。次に古観音廃寺Ⅰ式（一宮市伝法寺廃寺でも出土）は、１型式のみであるがⅡ Ad 類に分類され、南都七大寺系鬼瓦として認識できる鬼面文鬼瓦であり、尾張国分寺の創建と同じ頃の所産と推定され、遺跡からは若宮瓦窯で生産され尾張国分寺にも供給された大和大安寺の系譜をひく軒丸瓦が出土している。そしてもう一つのグループが、Ⅲ Ab 類に分類され、尾張元興寺や鳴海廃寺から出土しているアーチ形、直立縁、突線による施文、杏仁形の眼といった共通する特徴を兼ね備えた鬼面文鬼瓦の一群（尾張突線文系鬼瓦）である。その出自については、平城宮式鬼瓦等に直接系譜を求めるよりも、鬼瓦のモチーフから美濃の長良廃寺Ⅰ式等の近隣地域の鬼面文様を母体に発展した可能性を指摘できる（第４図）。

ⅲ　三河・遠江・駿河・伊豆における鬼瓦の導入と展開

三河地域では国分二寺創建以前の鬼瓦の出土例は知られていない。三河国分二寺の創建期の鬼瓦型式と考えられる三河国分二寺Ⅰ式Ａは、尾張国分寺系鬼瓦同様Ⅲ Aa に分類され、外縁が傾斜縁で眉間に釘穴を有し、額の隆帯表現などに尾張国分寺Ⅰ式との関連が窺える。平城宮式鬼瓦が在地化したものと考えられるが、歯牙は表現されず、鬼面の文様は尾張国分寺Ⅰ式より形式化が進んでいる。これに対し、９世紀代に下ると推定される三河国分二寺Ⅱ式は、手造りによる整形で粗雑な造りながらも上歯が明瞭に表現されており、修造期に異系統の軒瓦とともに採用された鬼面文様と考えられる。この他、８世紀後半の所産と推定される市道Ⅰ式は素文の鬼瓦であるが、鬼板の外側に彫刻を施した木質の文様部を釘留めした可能性も否定できず、素文のまま棟に飾られたかどうかについては一考の余地がある。なお、苗畑古窯Ⅰ式は手造りの鬼瓦が灰釉陶器窯で併焼されたもので、屋瓦の生産量が減少した 10 世紀代における、手造りによる鬼瓦の小規模生産の状況を具体的に物語る資料として興味深い（第５図）。

次に、遠江地域の状況をみると、白鳳期の篠場瓦窯出土の素文の鬼瓦を除けば、鬼瓦の展開は国分二寺の創建を契機とし、国分二寺以外でも、遠江国分寺式軒瓦を出土する寺院跡等から国分二寺出土の鬼瓦に類似した鬼面構成をとる鬼瓦の出土がみられる。これらの鬼瓦は、10 世紀代に下ると想定される遠江国分二寺Ⅱ式を除けば、いずれもⅢ Ac 類に分類され、遠江国分二寺系鬼瓦として一括できる。遠江国分二寺における創建鬼瓦の特定は難しいが、最大の特徴である外縁の二重の突線と固定装置が見られない点を平城宮式鬼瓦Ⅱ式Ｂの影響と考えれば、同様な形態をとり作りも丁寧な遠江国分二寺Ⅰ式Ａが創建期の鬼瓦である可能性が高く、遠江国分二寺Ⅰ式Ｂや六ノ坪Ⅰ式がこれに続き、その巻毛を弧状に形式化したものが大宝院廃寺Ⅰ式で、また巻毛の表現を欠如したものが竹林寺廃寺Ⅰ式と位置付けることができる（第５図）。

次に駿河地域の状況であるが、鬼瓦は片山廃寺（駿河国分寺）の創建鬼瓦と推定される

片山廃寺Ⅰ式と、その片山廃寺に瓦を供給した宮川瓦窯跡出土の宮川瓦窯Ⅰ式が確認できるほか、沼津市日吉廃寺でも近年の調査で鬼面文鬼瓦が出土している（今回未掲載）。片山廃寺Ⅰ式は、遠江国分二寺系鬼瓦と同様Ⅲ Ac 類に分類され、外縁を二重の突線で縁取り、眼が半球状に表出されるが、眉間には釘穴が認められ、鬼面構成も形式化が進むなど、遠江国分二寺Ⅰ式Ａより後出的要素が強い。また宮川瓦窯Ⅰ式には、三河国分二寺Ⅰ式Ａや遠江の大宝院廃寺Ⅰ式にみられるような孤状の隆帯表現がみられ、片山廃寺Ⅰ式より後出の鬼瓦と推定される（第５図）。

最後に伊豆地域の状況であるが、鬼瓦は伊豆国分寺跡から唐草文を配した鬼瓦の可能性のある資料が１点出土しているのみで、その系譜や展開の状況は不明である。

ⅳ　鬼瓦からみた各国の国分二寺創建期の様相

旧稿（前田 2000）では、各国分寺の創建鬼瓦の比較を通じて、尾張⇒三河、遠江⇒三河、遠江⇒駿河、美濃⇒飛騨といった創建鬼瓦の作笵の先後関係を類推し、これに均整唐草文軒平瓦から導き出された先後関係を重ね合わせることにより遠江⇒駿河⇒尾張⇒三河といった順に各国の国分寺の創建鬼瓦が成立したと推定した。

このうち遠江国については、天平 13 年（741）の詔勅直後に国分寺の造営が始まった可能性が指摘されており（森 1995）、鬼瓦の特徴から導き出される年代観とも一致する。その次に位置付けられる駿河国分寺（片山廃寺）の創建年代は、平城宮式軒平瓦 6663C 型式をモデルとした創建期の均整唐草文軒平瓦の年代が概ね天平宝勝年間に比定されており（平野ほか 2019）、天平 19 年（747）の国分寺造営督促の詔勅以降に全国の国分寺の造営が進んだとされる近年の研究成果（須田 1998・梶原 2010）とも矛盾せず、８世紀第３四半期に駿河⇒尾張⇒三河の順に各国の国分寺の造営が進んだと考えられる。

また、三河国同様に国分寺の創建にあたり軒丸瓦の成形台一本づくりなど中央の技術を導入した伊勢国では、創建が８世紀第２四半期に遡ると推定される国府の政庁域から鬼瓦は出土しておらず、鬼瓦の出土した国府の北方官衙や国分寺の創建は８世紀第３四半期に下る可能性が高いとされ（新田 2018a）、伊勢国においても天平 19 年（747）の国分寺造営督促の詔勅以降に国分寺の造営が進んだ様子が伺える（第３図）。

Ｄ　尾張産院政期鬼瓦

ⅰ　型式設定

院政期には尾張の東山窯や知多窯といった山茶碗等を併焼する瓦陶兼業窯で瓦が生産され、播磨産や讃岐産の瓦とともに、京都の鳥羽離宮や周辺寺院の造営に用いられたことが明らかとなっているが、今回のシンポジウムにあたり、この尾張産院政期鬼瓦（およそ 12 世紀代と考えられるもの）についても集成を試み、愛知県下の６遺跡の鬼瓦出土遺跡の一

覧表を作成した。そして、京都の鳥羽離宮や仁和寺出土の尾張産の鬼瓦出土例も含め尾張産院政期鬼瓦の型式設定を以下のように行った（第６図参照）。

Ⅰ式Ａ　社山古窯群及び吉田２号窯出土鬼瓦から設定。鳥羽東殿からも出土。角や耳、歯牙の表現される大型の鬼瓦で、笵型により整形され固定装置は見られない。

Ⅰ式Ｂ　萱野古窯跡群出土鬼瓦から設定。歯牙の表現される大型の鬼瓦で、笵型により整形されるが、珠文等は手づくり。

Ⅰ式Ｃ　京都の鳥羽東殿出土鬼瓦（京都市埋蔵文化財研究所蔵：今回略図作成）から設定。歯牙の表現される小型の鬼瓦で、笵型により整形され固定装置は見られない。

Ⅰ式Ｄ　名古屋大学構内出土とされる鬼瓦（名古屋大学蔵：今回略図作成）から設定。歯牙が表現される復元全長約 70m の超大型の鬼瓦で、手づくねにより整形される。

Ⅱ式Ａ　社山及び権現山古窯群出土鬼瓦から設定。牙の表現がないものをⅡ式としたが、Ⅱ式Ａは文様が簡素な小型品で、笵型により整形され固定装置は見られない。

Ⅱ式Ｂ　社山古窯群出土鬼瓦から設定。文様は簡素で、鼻が相対的に大きく造られる中型品の鬼瓦。笵型により整形され固定装置は見られない。

Ⅱ式Ｃ　濁池北古窯出土鬼瓦から設定（愛知県陶磁美術館蔵全形復元資料から略図作成）。脚足の細長い中型品であり、笵型により整形され固定装置は見られない。

Ⅱ式Ｄ　濁池北古窯出土鬼瓦及び仁和寺出土鬼瓦（京都市埋蔵文化財研究所蔵木村コレクション）から設定（今回復元略図作成）。Ⅱ式Ｃと同じく脚足の長い中型品で、笵型により整形され固定装置は見られない。

ii　院政期鬼瓦の固定方法

古代の瓦葺建物における稚児棟（二の鬼）の出現については、12 世紀後半頃の絵画資料（伴大納言絵巻や信貴山縁起絵巻）等から古代末期には確実に出現していたとされるが（島田 2009）、具体的な考古資料からそれに言及したのは、京都市鳥羽離宮の金剛心院跡出土瓦の分析（上村ほか 2017：大小７種の鬼瓦（第７図）について一の鬼・二の鬼の使い分けも含む使用の可能性について言及）がある程度で、現存建物事例から二の鬼の設置状況が類推できる新薬師寺本堂隅棟や興福寺北円堂隅棟の鎌倉時代の鬼瓦を用いた稚児棟（一の鬼は小型で二の鬼は大型で挟りも大きい：第８・９図）以前の院政期の鬼瓦の使われ方については不明な点が多い。

ところで、尾張産院政期鬼瓦のうち中型のⅡ式Ｃ・Ｄは、唐招提寺や西大寺の金銅宝塔（鎌倉時代）の二の鬼の形状に似て両脚部が細長く伸び、小型のⅡ式Ａ等を一の鬼とし組み合わせて用いられた可能性を指摘できるが、残念ながら出土状況からこれらの鬼瓦を一の鬼・二の鬼の組み合わせとして用いた確証は得られていない。ただ、大型品のⅠ式Ａ・Ｂなどが主に大棟に用いられ、中型・小型品が稚児棟を形成する隅棟において使い分けられた可能性を指摘でき、鳥羽離宮金剛心院の鬼瓦の分析同様に、建物ごと棟ごとの鬼瓦の使

われ方についても今後注意を払っていく必要がある。

また、こうした院政期の鬼瓦の下辺のくりこみに注目すると、脚足の長いⅡ式C・Dは稚児棟の末端の棟丸瓦も含めた慰斗積を上から跨ぐように設置された可能性が高く（第10図の設置A型）、播磨産の院政期鬼瓦である林崎三本松瓦窯跡出土の鬼瓦（池田ほか2017：第11図）なども、稚児棟末端の棟積みの形状に合わせてくりこみを加工した可能性を指摘できる。しかし、これら院政期の鬼瓦には基本的に固定装置がなく、傾斜のある隅棟に設置した場合転倒してしまうリスクが大きかったと考えられる。そこで、当初は設置A型のような稚児棟末端を跨ぐ設置方法だったものが、やがて現存建物事例（第8・9図）にみられるような稚児棟の棟積み後方に二の鬼を立てかけるような設置B型への移行を促し、その後13世紀代の鬼瓦に見られるように裏面に必ず把手を施す鬼瓦へと鬼瓦設置方法の改善が図られた可能性を指摘しておきたい。

（豊川市教育委員会）

謝　辞

本稿を作成するにあたり、下記の機関や方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
愛知県陶磁美術館、東海市教育委員会、名古屋市教育委員会、上村和直、大西　遼、梶原義実、武田寛生、永井伸明、新田　剛、野澤則之、早川由香里、宮澤浩司

参考文献（刊行順）

立松　彰1988『トトメキ遺跡』東海市教育委員会
服部哲也ほか1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
森　郁夫1995「遠江国分寺の瓦と寺の造営」『遠江国分寺跡の調査』静岡県埋蔵文化財調査研究所
三重県の古瓦刊行会1996『三重の古瓦』
須田　勉1998「国分寺の創建」『聖武天皇と国分寺－在地から見た関東国分寺の造営』関東古瓦研究会
前田清彦2000「東海地方の古代の鬼瓦とその系譜」『三河考古』第13号
森　郁夫2001『ものと人間の文化史100　瓦』（財）法政大学出版局
木村有作2003「尾張元興寺跡第10次」『埋蔵文化財調査報告書48』名古屋市教育委員会
服部哲也2004「資料紹介　尾張元興寺跡出土の鬼面線刻瓦」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』6
藤原秀樹2005『図録　古代の鬼瓦』鈴鹿市考古博物館
鈴木敏中2007「伊豆国分寺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会
山田　猛2008「三田廃寺」『三重県史　資料編　考古2』三重県
島田敏男2009「10隅降棟鬼瓦の位置と納まり」『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究4　瓦・屋根』奈良文化財研究所学報第80冊　奈良文化財研究所
梶原義実2010『国分寺瓦の研究　考古学からみた律令期生産組織の地方的展開』名古屋大学出版会
北條献示・梶原義実・中井弘次2011『尾張国分寺跡発掘調査総括報告書（1）』稲沢市教育委員会
武田寛生ほか2013『篠場瓦窯・上海土遺跡』静岡県埋蔵文化財センター
池田征弘ほか2017『明石市林崎三本松瓦窯跡発掘調査報告書』明石市
上村和直ほか2017『平成28年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書　鳥羽離宮金剛心院跡出土品』京都市埋蔵文化財研究所
平野吾郎・安藤寛2017『特別史跡遠江国分寺跡－本編補遺・遺物資料編－』磐田市教育委員会
新田　剛2018a「東海地方の一本づくり・一枚づくり」『第8回シンポジウム　8世紀の瓦づくりⅦ　一本づく

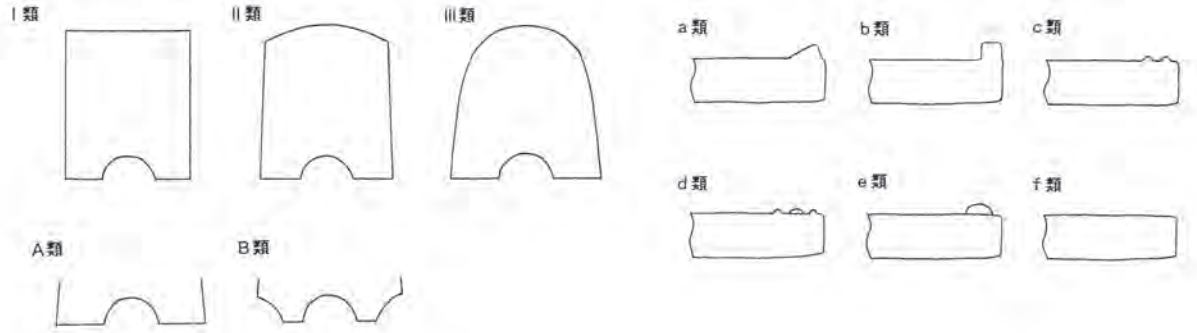
り・一枚づくりの展開１　発表要旨』奈良文化財研究所
新田　剛 2018b『史跡伊勢国分寺跡－遺物編－』鈴鹿市
平野吾郎ほか 2019『史跡片山廃寺跡発掘調査報告書（遺物編）』静岡市教育委員会

図版出典

第１図１・２・５：筆者作成。３：新田 2018b。４・５：前田 2000。６・７：山田 2008。８：藤原 2005。９・10：三重県の古瓦刊行会 1996。
第２図 11：北條・梶原・中井 2011。12：服部ほか 1994。13：木村 2003。14：服部 2004。15：立松 1988。16：武田ほか 2013。17：平野・安藤 2017。18：平野ほか 2019。19：鈴木 2007。
第３～５図：前田 2000 を改変。
第６図Ⅰ式Ｃ・Ⅰ式Ｄ・Ⅱ式Ｂ・Ⅱ式Ｃ・Ⅱ式Ｄ：筆者作成。他は出土遺跡一覧表掲載の文献。
第７図：上村ほか 2017。
第８・９図：筆者撮影。
第 10 図：筆者作成。
第 11 図：池田ほか 2017。

型式設定にあたっての分類の視点

(1)外形の分類　　Ⅰ類：(長)方形　Ⅱ類：円(角)頭台形　Ⅲ類：アーチ形
(2)下辺の形態の分類　A類：下辺中央1個所にくりこみ　B類：下辺中央と両隅の3箇所にくりこみ
(3)外縁の分類　a類：傾斜縁　b類：直立縁　c類：2(1)条突線　d類：連珠文帯　e類：連珠(大粒)　f類：素文
(4)製作技法の分類　①笵型　②笵型＋施文　③手造り　④平瓦を加工（無文）
(5)固定装置　①釘穴（円形は○、四角形は□）　②背面に把手　③固定装置無し
(6)文様　①蓮華文　②鬼面文　③重弧文　④唐草文　⑤無文



第１表　東海地方の古代鬼瓦型式一覧

No.	型式名	類別	製作技法	固定装置	文様	No.	型式名	類別	製作技法	固定装置	文様
1	智積廃寺Ⅰ式	ⅡAf	手造り	無し	鬼面文	26	勝川廃寺Ⅲ式	(Ⅲ)Ae	笵型？	不明	鬼面文
2	伊勢国府Ⅰ式	ⅡAb	笵型	釘穴○	鬼面文	27	古観音廃寺Ⅰ式	ⅡAd	笵型	把手	鬼面文
3	伊勢国分寺Ⅰ式	ⅡA(b)	笵型	釘穴○	鬼面文	28	尾張元興寺Ⅰ式A	Ⅲ(A)b	笵型	釘穴○	鬼面文
4	伊勢国分寺Ⅱ式	ⅢAb	笵型	釘穴○	鬼面文	29	尾張元興寺Ⅰ式B	ⅢAb	笵型	不明	鬼面文
5	伊勢国分寺Ⅲ式	ⅢAd	笵型	釘穴○	鬼面文	30	尾張元興寺Ⅰ式C	ⅢAb	笵型	不明	鬼面文
6	伊勢国分寺Ⅳ式	(Ⅲ)Ab	笵型	不明	鬼面文	31	鳴海廃寺Ⅰ式	ⅢAb	笵型	釘穴○	鬼面文
7	伊勢国分尼寺Ⅰ式	ⅡAf	笵型	不明	鬼面文	32	トトメキ廃寺Ⅰ式	(Ⅱ)Af	平瓦加工	不明	素文
8	伊勢国分尼寺Ⅱ式	ⅢAf	笵型	不明	鬼面文	33	三河国分二寺Ⅰ式A	ⅢAa	笵型	釘穴○	鬼面文
9	南浦(大鹿)廃寺Ⅰ式	不明	笵型	不明	鬼面文	34	三河国分二寺Ⅰ式B	ⅢAa？	笵型	不明	鬼面文
10	天花寺廃寺Ⅰ式	(Ⅰ)Ae	笵型	不明	鬼面文	35	三河国分二寺Ⅱ式	Ⅲ(A)f	手造り	無し？	鬼面文
11	伊勢寺廃寺Ⅰ式	ⅢBf	笵型	不明	唐草文	36	市道Ⅰ式	ⅢA	手造り	釘穴○3	素文
12	伊勢寺廃寺Ⅱ式	(Ⅲ)Ab	笵型	不明	鬼面文	37	苗畑古窯Ⅰ式	(Ⅰ)Af	手造り	無し	鬼面文
13	ヒタキ廃寺Ⅰ式	ⅢAb	手造り	釘穴○	鬼面文	38	篠場瓦窯Ⅰ式	ⅡAf	平瓦加工	無し	素文
14	栃ケ池瓦窯Ⅰ式	不明	笵型	不明	鬼面文	39	遠江国分二寺Ⅰ式A	ⅢAc	笵型	無し？	鬼面文
15	三田廃寺Ⅰ式	不明	笵型	不明	蓮華文	40	遠江国分二寺Ⅰ式B	ⅢAc	笵型	無し？	鬼面文
16	三田廃寺Ⅱ式	不明	笵型	不明	鬼面文	41	遠江国分二寺Ⅰ式C	Ⅲ(A)f	笵型	不明	鬼面文
17	中島廃寺Ⅰ式	Ⅲ(A)b	笵型	釘穴○	鬼面文	42	遠江国分二寺Ⅰ式D	ⅢAc？	笵型	不明	鬼面文
18	尾張国府Ⅰ式	(Ⅲ)Ab	笵型	不明	鬼面文？	43	遠江国分二寺Ⅱ式	Ⅲ(A)f	笵型？	不明	鬼面文
19	尾張国分寺Ⅰ式	ⅢAa	笵型	釘穴○	鬼面文	44	大宝院廃寺Ⅰ式	ⅢAc	笵型	不明	鬼面文
20	尾張国分寺Ⅱ式	ⅢAa	笵型＋施文	釘穴□	鬼面文	45	六ノ坪Ⅰ式	Ⅲ(A)c	笵型	無し	鬼面文
21	尾張国分寺Ⅲ式	(ⅢA)	不明	不明	不明	46	竹林寺廃寺Ⅰ式	Ⅲ(A)c	笵型？	無し	鬼面文
22	大山廃寺Ⅰ式	Ⅲ(A)f	笵型	不明	蓮華文	47	片山廃寺Ⅰ式	ⅢAc	笵型	釘穴○	鬼面文
23	勝川廃寺Ⅰ式A	ⅢAf	手造り	釘穴○	重弧文	48	宮川瓦窯Ⅰ式	(Ⅲ)Aa	笵型	不明	鬼面文
24	勝川廃寺Ⅰ式B	(Ⅰ)Af	手造り	不明	重弧文	49	伊豆国分寺Ⅰ式	不明	笵型	不明	唐草文
25	勝川廃寺Ⅱ式	(Ⅲ)Af	笵型？	不明	蓮華文？						



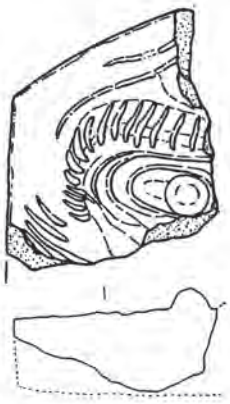
1　伊勢国府Ⅰ式（修正復元図）



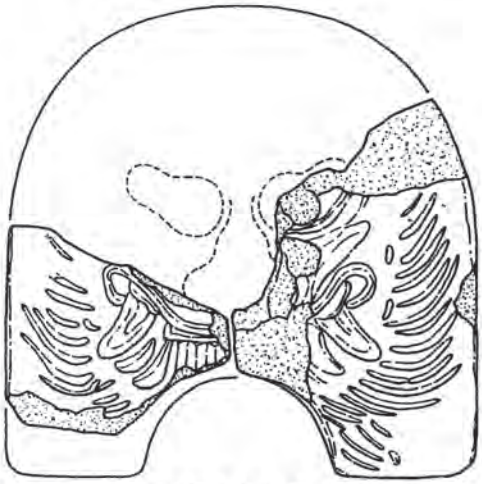
2　伊勢国分寺Ⅲ式（修正復元図）



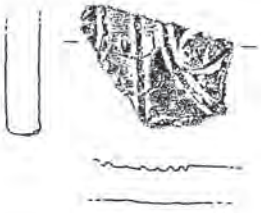
3　伊勢国分寺Ⅳ式



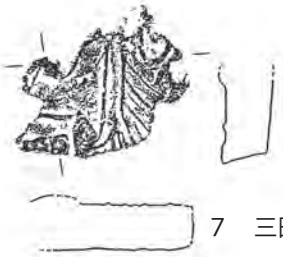
4　伊勢国分尼寺Ⅰ式



5　伊勢国分尼寺Ⅱ式（復元図）



6　三田廃寺Ⅰ式

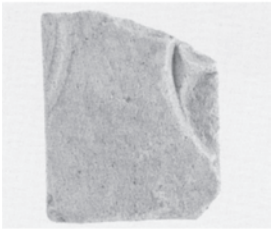


7　三田廃寺Ⅱ式





8　南浦(大鹿)廃寺Ⅰ式

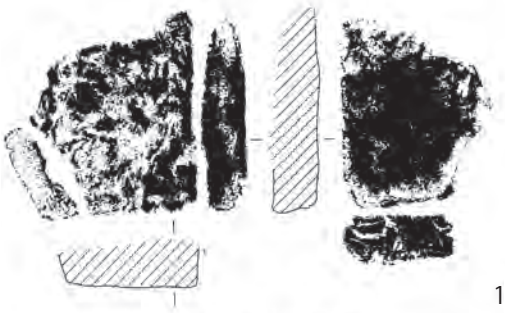


9　南小山廃寺瓦製品



10　広明町瓦窯跡瓦製品

第１図　東海地方の新出・復元図修正鬼瓦（１）（１～７は１：６　８～ 10 は縮尺任意）



11　尾張国分寺Ⅲ式



12　尾張元興寺
蓮華文瓦製品



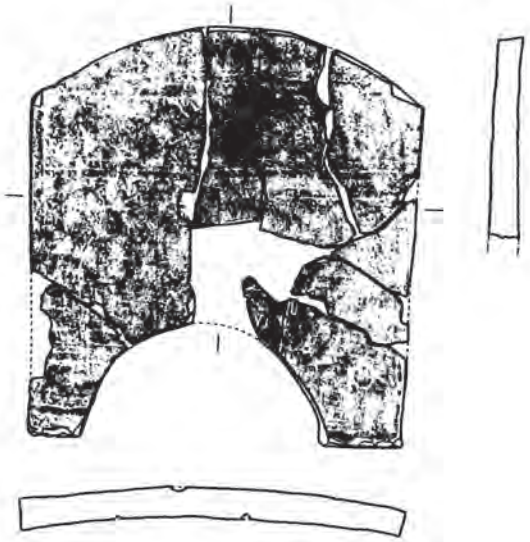
13　尾張元興寺Ⅰ式C



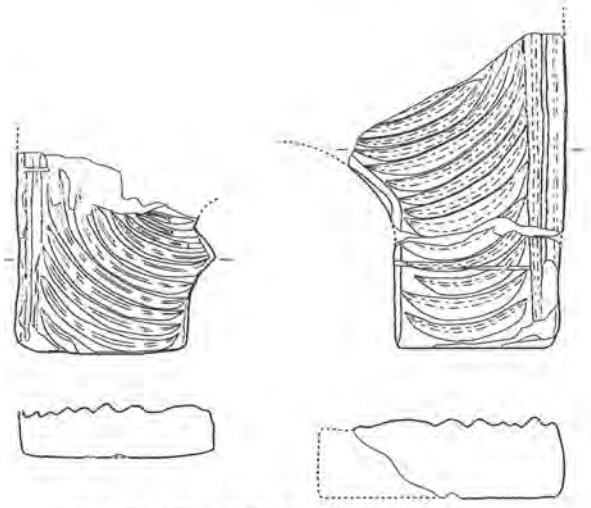
14　尾張元興寺
鬼面線刻平瓦



15　トトメキⅠ式



16　篠場瓦窯Ⅰ式



17　遠江国分寺跡出土の新出鬼瓦



18　片山廃寺Ⅰ式



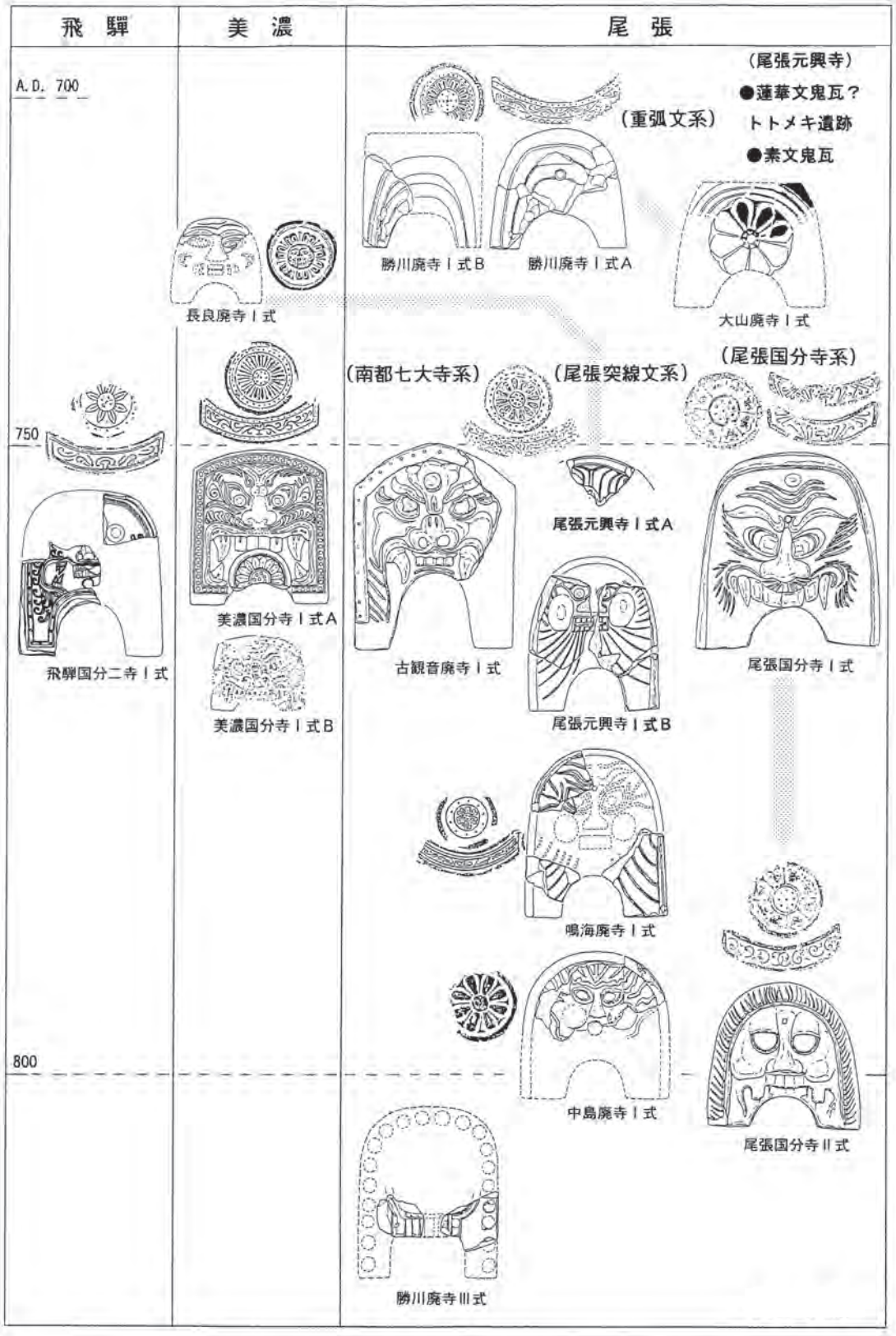
19　伊豆国分寺Ⅰ式

0　20cm

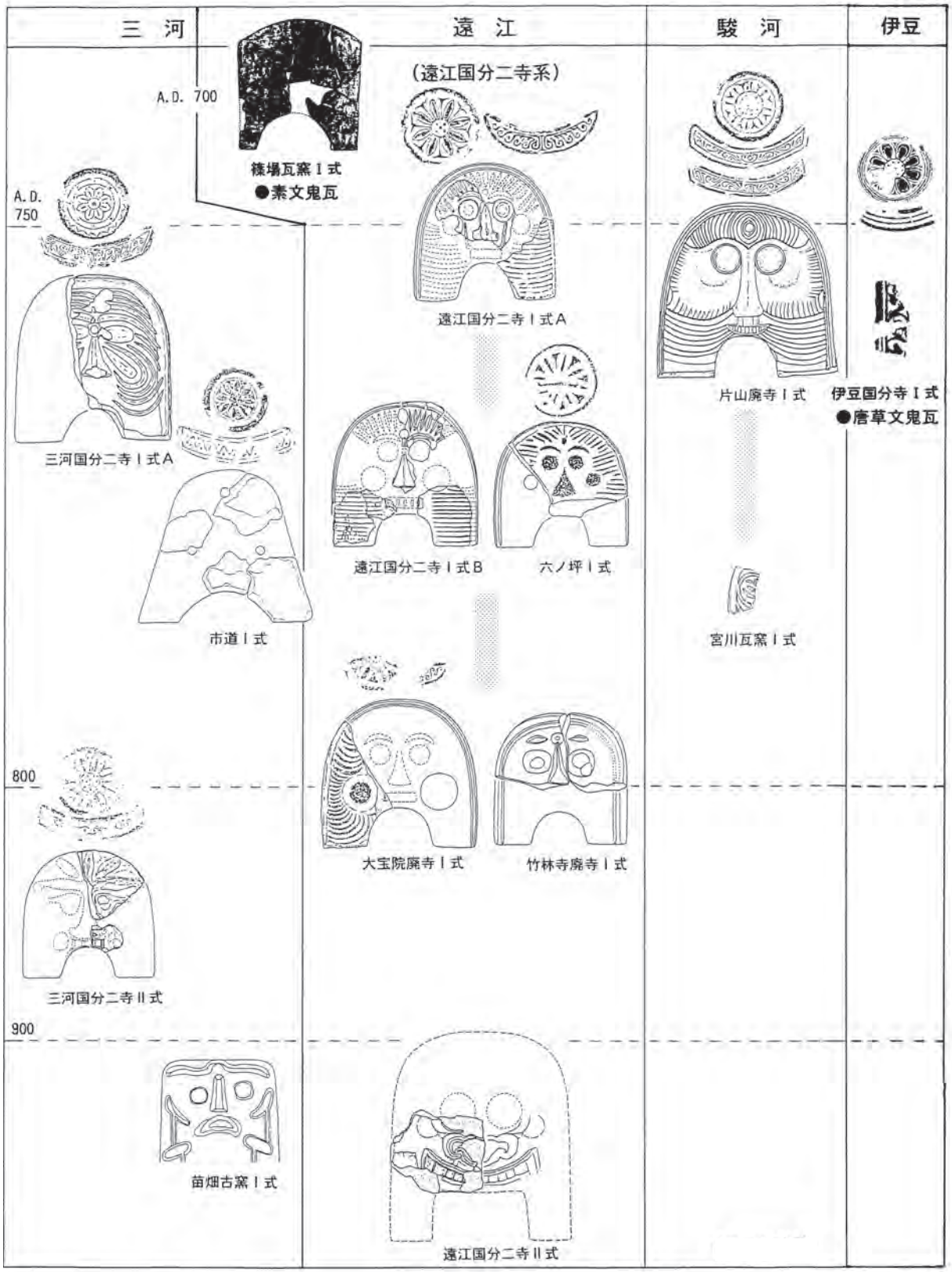
第２図　東海地方の新出・復元図修正鬼瓦（２）（１：６）



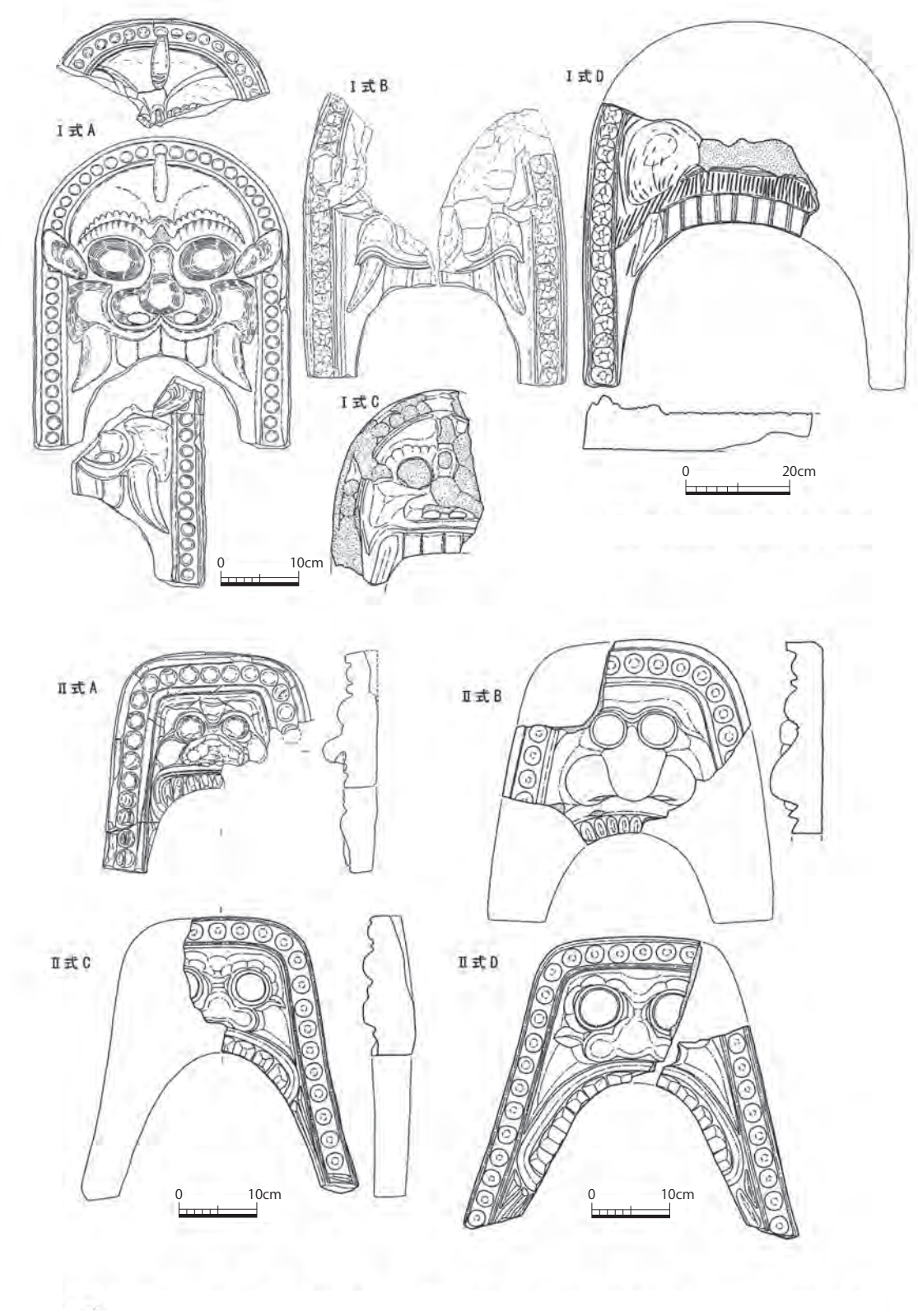
第３図　伊勢・伊賀の古代の鬼瓦の変遷図（１：15）



第４図　飛騨・美濃・尾張の古代の鬼瓦の変遷図（１：15）

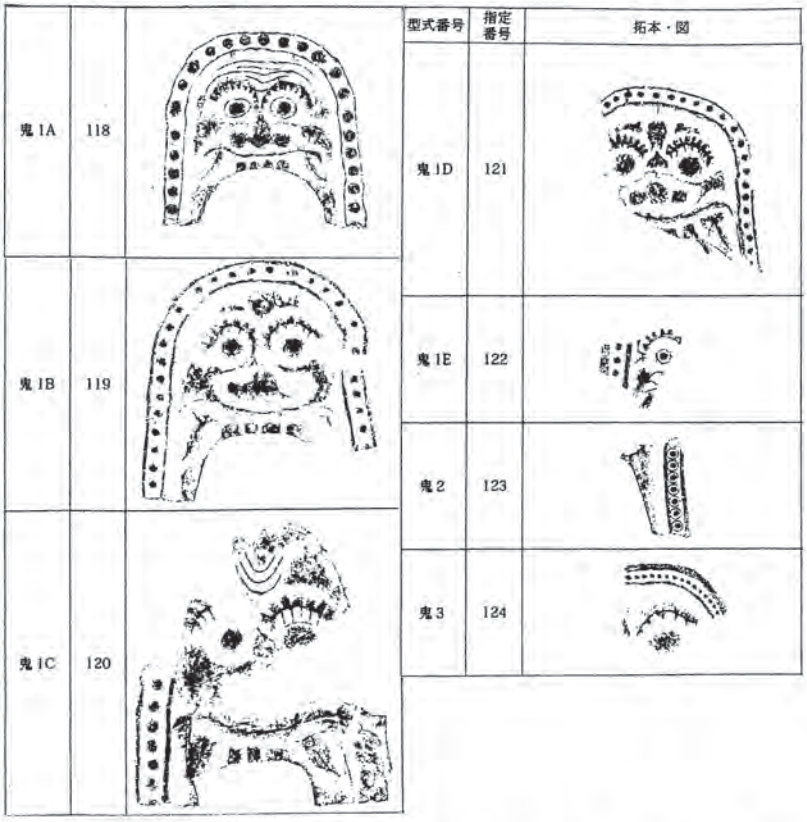


第５図　三河・遠江・駿河・伊豆の古代の鬼瓦の変遷図（１：15）



Ⅰ式Ａ：吉田２号・社山・鳥羽東殿　Ⅰ式Ｂ：萱野　Ⅰ式Ｃ：鳥羽東殿　Ⅰ式Ｄ：名大構内
Ⅱ式Ａ：社山・権現山　Ⅱ式Ｂ：社山　Ⅱ式Ｃ：濁池北　Ⅱ式Ｄ：濁池北・仁和寺

第６図　尾張産院政期鬼瓦集成（Ⅰ式Ｄは１：12　それ以外は１：８）



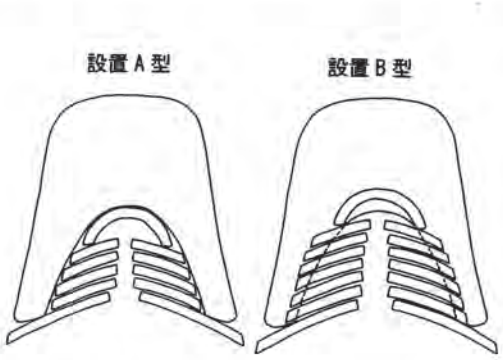
第７図　鳥羽離宮金剛心院跡出土鬼瓦型式一覧（１：12）



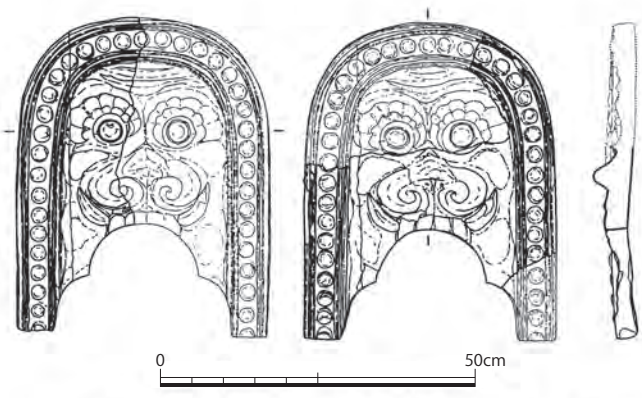
第８図　新薬師寺本堂隅棟の一の鬼・二の鬼



第９図　興福寺北円堂隅棟の一の鬼・二の鬼



第 10 図　二の鬼の設置方法模式図



第 11 図　林崎三本松古窯出土鬼瓦（１：12）